信濃奇區一覽

ル 4
1686
3

1686
巻 3

緯文庫

緯濃奇區一覽巻之三目録

佐久郡之部

古石燈臺
古鈴
松原湖
鑄馬
玄三髭
蛇石
相生松
浅間山
駒形石
彼岸清水
農夫殊行
櫛岩
香炉岩
皓月輪
無名藥物
布引山
蝦蟇鬪
婆良小屋
滋雲山什貲
古陶器
宝林山什貲
碓氷紅葉
亀石
下之条古物
王塚
立科山

緯文庫

緯修堂

小縣郡之部

四阿山　国分寺埋木　鳴石
虚空蔵山　大工嗜蛇　獅子踊
感馬　魚骨石　出浦
鴻巣　佛岩　柳草

信濃奇區一覽巻之三

佐久郡之部

松原

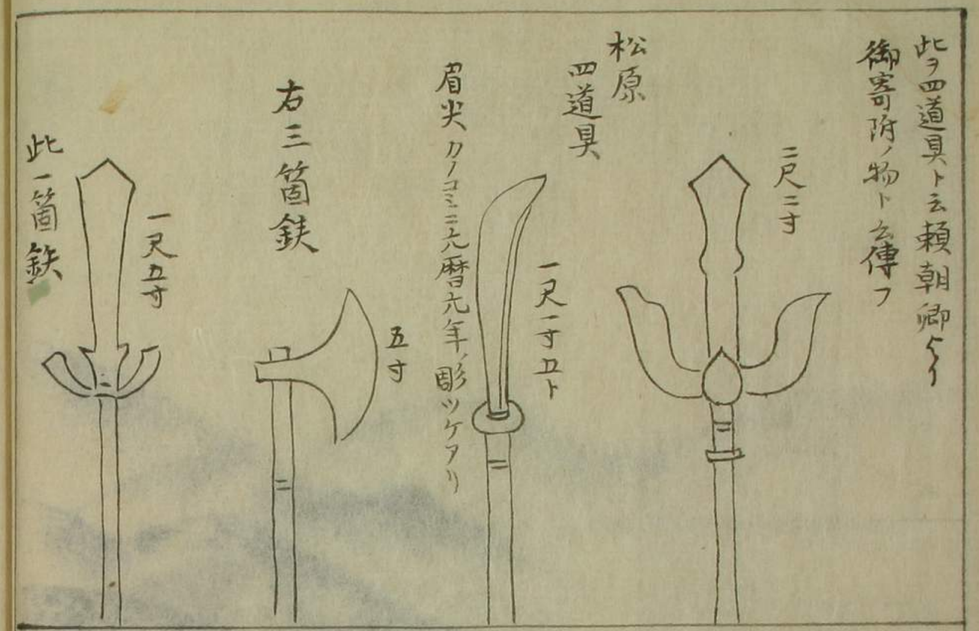
松原村ゟ両箇の湖水あり大湖尾長湖と云大湖の東北ゟ諏訪上下の神社あり別当友鳴山真光寺天台神主両家あり社領ハ三十石一村ニ成る圭田あり大湖ハ深き所五十尋ニ成る魚類ハ元来鮒のミなり近年鯉を放つ鮒ハ大なる者曇りて風ふき日必浮びて見ゆ七月御射山祭の時山上より臨めハ大きなるハ先ゟ游ひ小きハ水ゆれて黒くゝ成てりと大鮒ハ長さ三間ばかりとゝ又ハ三丈許ゝ其間二百間程遠りたハ詳ニ知れ難尾長湖ハ深き所十五尋ニ成る大魚多ゝ出る稀ニ見る者少し又湖中ニ三檀を築て上に石塔婆を建水の涸る時ハ弁天洲ゝ出ハ一檀ハ多下の三檀ハ水底往古ゟ陽ること今の如くなる時の物ゝ

松原
西湖

大湖
尾長湖
其外ニ
重湖
御所山湖
白児ウミ
カツパウミ
ヘで他
ヒルモ他等
神領ノ内ニ有

東

此ノ四道具ト云頼朝卿ノ
御寄附ノ物ト云傳フ



社頭鐘彫日

奉施入撞鐘一口四尺二寸二尺六寸
右志者為法界衆生也
弘安二年八月十五日
大勸進法阿弥陀佛
勸進説法二人念阿道阿
大檀那源朝臣光長
并諸檀那
大工伴長敬白

信州佐久郡大井庄落合村新善光寺
又鐘ノフチ廻リニ彫有アリ

寛元二年甲辰七月奉鑄写本師阿弥陀如來同八月奉鑄観音勢至一光三尊金銅建長九年己酉十月三日不断念佛始ノ勸進法阿弥陀佛　傳云延德元年甲斐ノ敵將作久郡乱入六月五日岩尾ノ城ヲ焼討ニス同時落合慈壽寺炎焼時甲州勢鐘ヲ掠取去リ此地ニ將來テ捨置云ヒ光長ハ小笠原長清ノ七男大井太郎朝光ノ嫡子世々據ニ岩村田

古石燈臺

十日町の里の中程僧の川辺ふ古き石燈籠一基あり次袋の中ふ六地蔵と云笠石大袋ニ蓋近ハ六角ふして校石ふて下ハ角ふ笠石ハ裏表くみきて永享二年好色師奥州住秀鶴と云ふ名種々信ふて好色師ハ何とゆふ人ぞ

近世奇跡考ふ云江戸花川戸の町口ふ六地蔵を刻ふる古き石燈籠一基を彼地の古老ふ問ふに前ハ慈安元年と云文字ハ有ふ之と云者ハ石燈籠を一基ふて有ふ多くの世の如く両基ふ有ハ有ふ之洛北鞍馬の寺前尾伝熟田の社の南ふ有ふ大石燈籠一基之彼六地蔵の燈籠一基あり又古き証ふ云ふ

古鈴

入沢村諏訪の神祠ゝ式内
佐久三社の内英田神社ゝ文
字ゝ傳つけたる古鈴あり
先年其地の田中ゝ堀出
と云古色愛ゝ〳〵

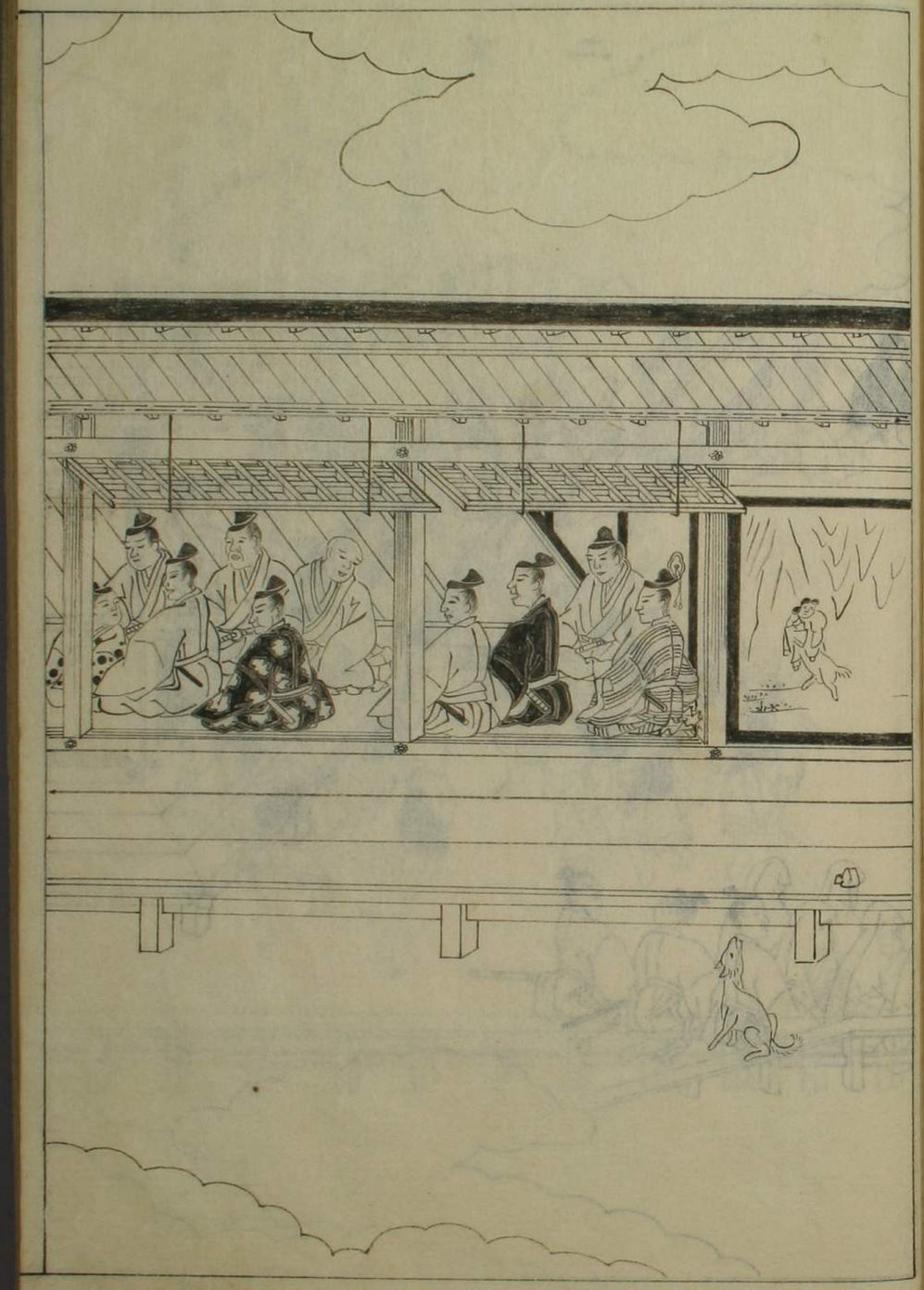
銅馬

臼田下の諏方の神祠ゝ一箇の銅馬あり是ハ元和の頃此里ゝ相沢
半左門と云者あり〻子長五郎〻いゝ〻相沢ゝ云地の古墨ゝ
田植の男女十二人の像ゝ牛馬糸粕鎌馬鈴ゝを穿出せしもの
傳物ゝ〻其中ゝ馬ゝ〻ゝ花ゝ納〻〻ゝ行ふ式人ゝれを
鑑定して九千年の遺物ゝ稱ゝ

紫雲山什貲

野沢村金臺寺ハ弘安二年の草創ゝて元祖一遍上人初開の地ゝ

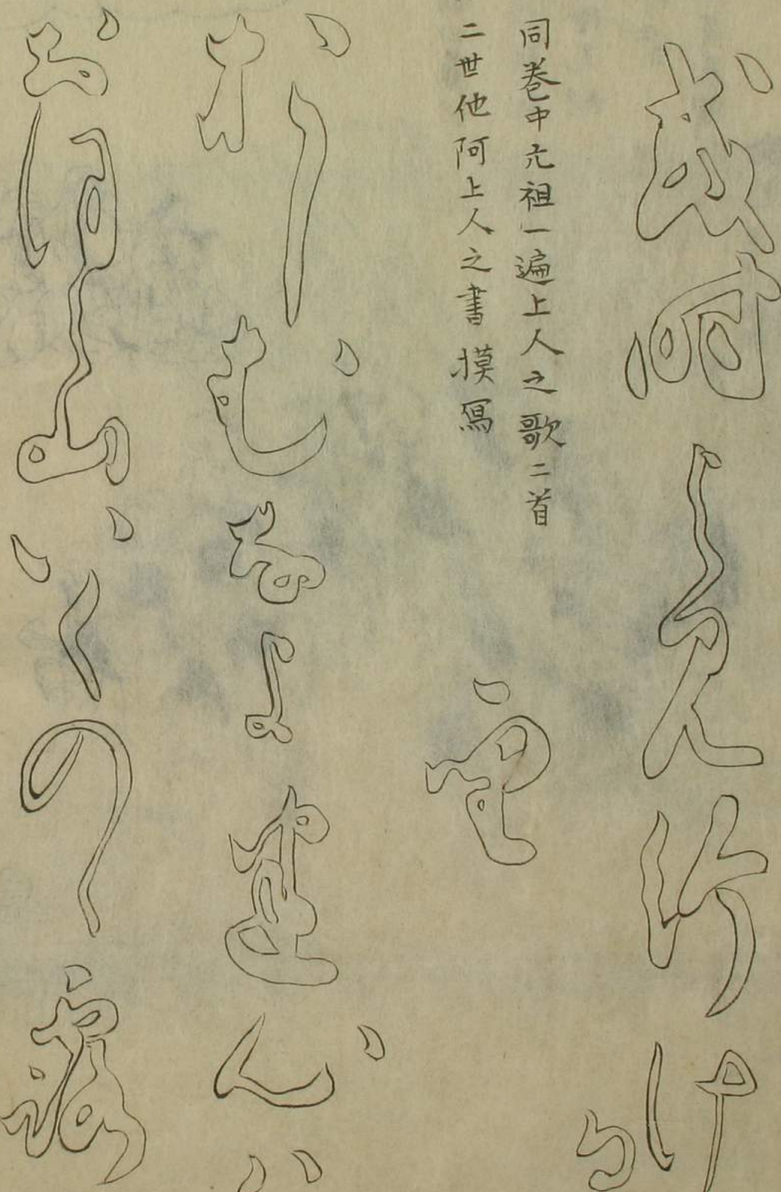
上人ハ伊豫国河野七郎通廣ゝ三男始松樹丸ゝ号ゝ十五ゝ〻十名を随縁坊ゝ改天台宗ゝ学後
法然上人の直弟西山善恵坊門流向西寺の聖達上人ゝ逢て念仏門ゝ入名を知真ゝ改建治
元年九月より百日の間紀州熊野山ゝ参籠神勅の頃を受て一遍ゝ号ゝ普く衆生ゝ勧て諸
国遊行の次ゝ大隅国正八幡宮一七日衆徒満ゝる夜束帯の神影現形ゝ略一声の十念ゝ授ゝ
〻信堅固ゝて十四年の間遊行正應二年八月九日摂津兵庫苅観音堂入寂五十歳
北条記ゝ建治二年遊行一遍上人信州伊那ゝ行て踊躍念仏ゝ〻とあるハ今の野沢金臺ゝ〻
別時ゝ紫雲の立れハ紫雲山ゝ号ゝ〻ゝ別時ゝ〻ハ今ゝ〻沢の杉山ゝて毎年正月ゝ七日七夜寺中ゝ〻ゝ祥
又跡部ゝ鉦鑄場ゝ〻ゝ旧跡ゝ〻ゝ時の城主伊那太郎時信ゝ〻ゝ人八幡宮の金殿石を陽ゝ〻ゝ寄附ゝ〻ゝ
傳ゝて遊行の什宝也其一箇ハ今此寺ゝ有 天明年中武異ゝ堀出せり 鉦徑ゝ寸四ト代什宝ゝ同 延慶三年三月ゝ日ゝ彫つけ有 二世他阿上人
真教和尚の筆の繪詞傳十巻相州藤沢道場ゝ五丈中尊二巻當寺の什物ゝ成て百巻初ゝ日同ニ
年信濃国佐久郡伊那ゝ云所ゝ歳末の別時ゝ紫雲の下ゝ立付ゝ

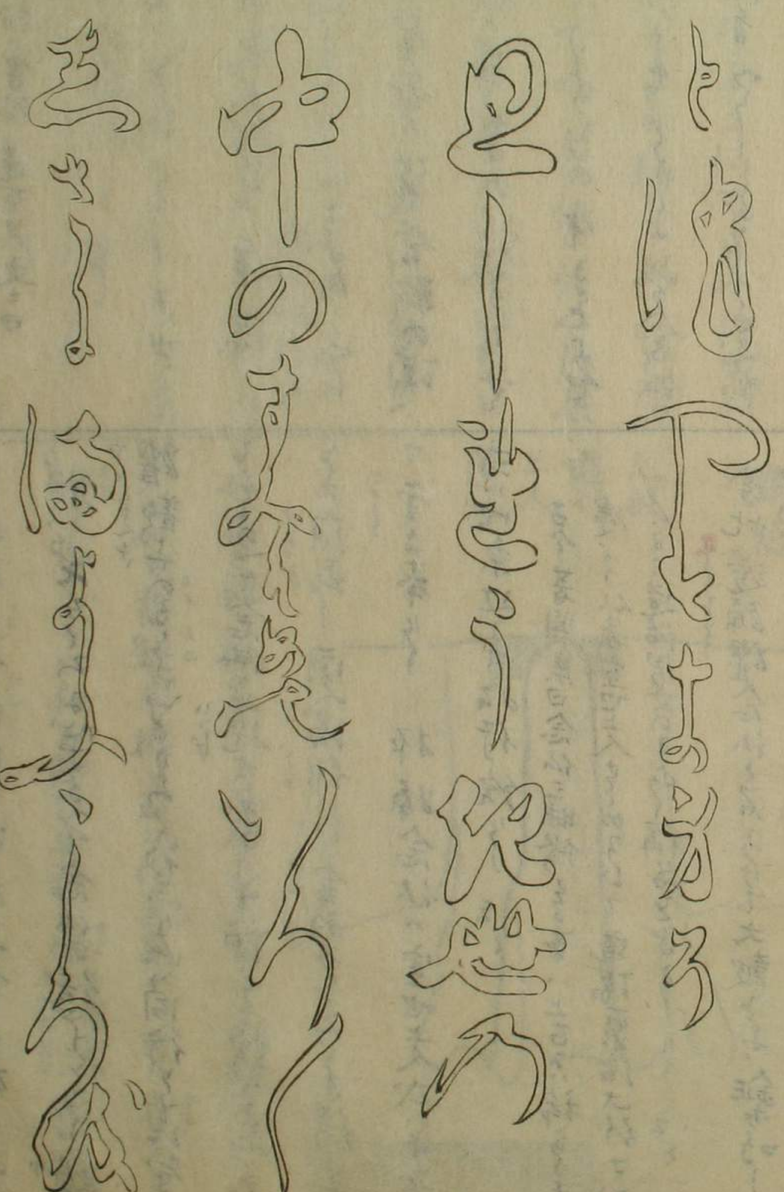


繪詞傳第二卷
伴野野沢の城中にて
元祖一遍上人
踊躍念佛の図

其二
好古小録曰藤沢
道場遊行録記
十巻畫隆光詞
二世遊行云云
画家系譜云云
隆光 栗田佐眼
民部卿

同巻中元祖一遍上人之歌二首
二世他阿上人之書 摸寫





二世上人ヨリ當寺ノ住持ヘ来訪ノ書翰一通有其文ニ曰

鎰念ハちをひろしきさえ
きまて□ともも道場ハ
対す閑まうつるを□ハ上け
く来り日年ハ皆合戦の壌ヘ
今ハあハ弟るまの縁まて□
引まし□まひの中まをよせ
まはの□ともま皆念仏
まてけるやしらしるも
とそほまふ顔めまる承享

また其所ニ念佛往生試みる人ありて聖を留
まりる此ころニ心すゝみて念仏の信をとく踊(ゆ)
躍(やく)歓(くわん)喜(き)のあまりいともろく縁ちりれハ同行もちに声
をそへて念佛し提(ひさげ)をたゝきて拍子とりたまへる
その随喜(ずいき)し聞人渇仰(かつがう)して金磬(きんけい)をみたき請させ
て雷(ひしり)る奉りく　抑踊念仏ハ空也上人式ハ市屋
式ハ此条迄まて始行給ひり　云々
古今著聞集曰念仏三昧修する事ハ上古ニハ稀なり天
慶より以来空也上人すゝめ給ひて道場聚落式ニ行さか
んにて道俗男女のまねく称名をすなりく　云々
今比邊(又ところ)踊躍念仏と名付けて大鼓を打鉦を鳴し
囲繞(かねう)して唱るもの承ありもしまは

あのり□述をまへおて念仏
先まハ皆を仏すめて往生
遂さセいらきの後ハあまり皆
見わりて人て念仏の行い奥
りあつ石ほうちにみへゑし
れあふうし专を修修道仏

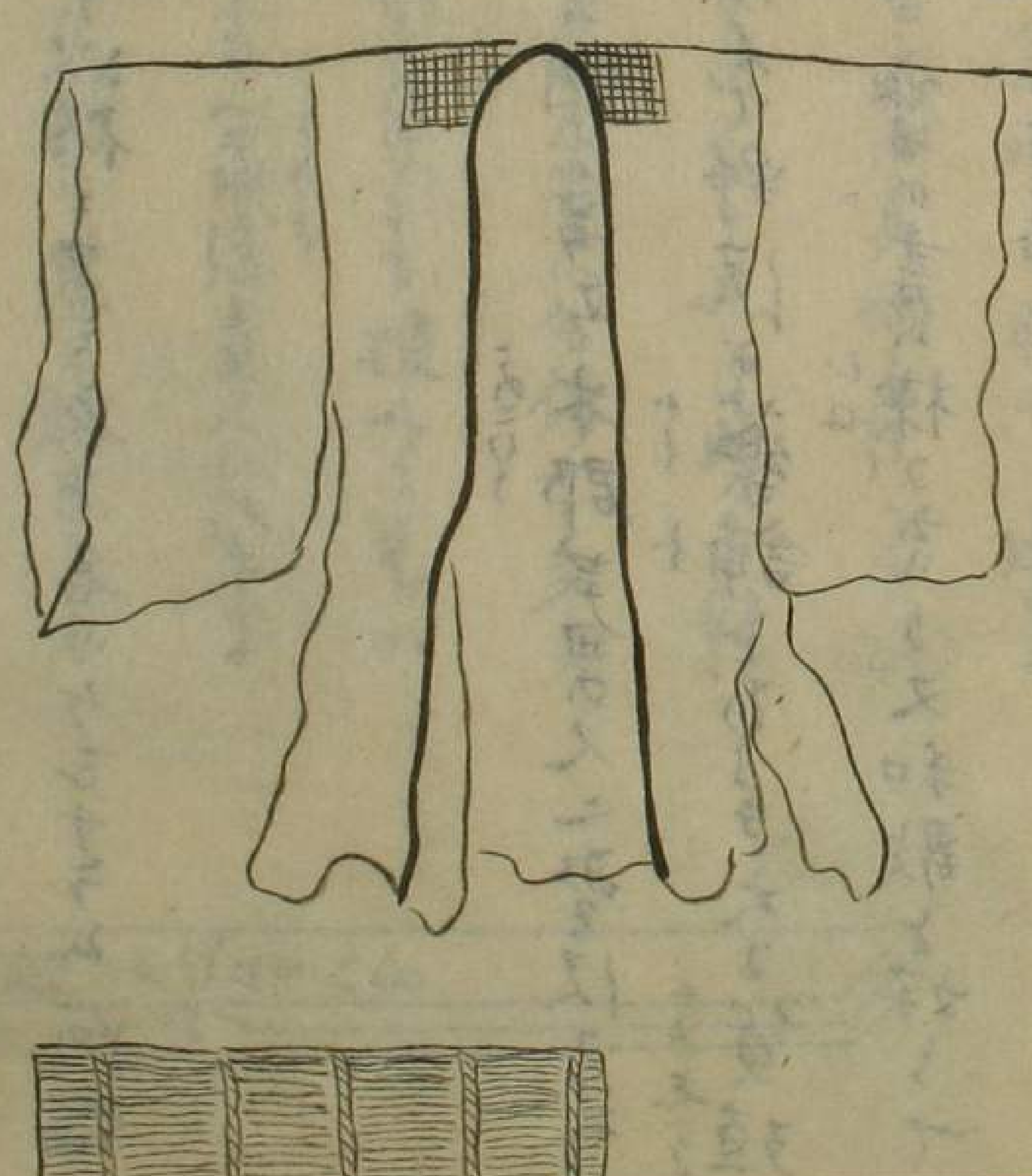
他阿弥陀仏

ウリカイ

遊行條條仏へまいる

編衣(アミコロモ)

元祖遊行上人遺物



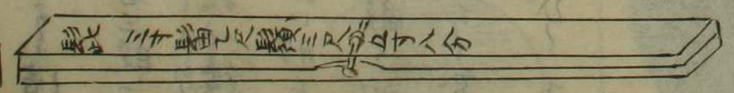
好古日録云仏家ニアミ衣ト云服アリ麻縻ヲ以テ編タル如リ裁縫(タチヌヒ)ハ十徳ト同シ但其異ナル所ハ肩(カタ)ヌキト襟(エリ)ノ長キトノミ○和名鈔引唐韻云褸(カイ)音傕和名未知古呂毛喪服也○河海鈔云服者着(キル)衣(フク)也○拾遺和哥集　藤衣織る

絲ハ小ゝれヤ絹ハ粉れと乾くとも今 貫之○明星鈔云本義ハ藤皮ニテ織し
ル布也○或鈔云禖衣裘服也此制不知何代始藤皮ヲ打和テ以麻ヲ編ル如ク織
テ造之稱藤衣トモ○或源氏物語註ニ藤衣ハ藤ヲアミル如ク織ヲ作ルト有此等ノ
説ヲ以テミレハアミ衣ハ即禖衣ナラム或古画ニ烏帽子ニ此服ヲ着ル人墳墓ヲ拜スル
ノ図アリ以一證トスヘシ其體編ル如クナルヨリ以俗ニアミ衣ト名ツケシナラム 阿彌
衣ト書ハ假借ナルヘシ云々

玄三 鬚

野沢の醫師金子玄三名ハ命朝字ハ子陽玄洲と号す本郡芦田の人之聖伏ヲ学
願下因羽ヲ親炙して文書を学ひ壯年に及て野沢ヲ藥舗をひらき大ニ貨殖
を後醫所をひらき平生書を愛するを好て書齋の書ハ棟ニ充り又和歌を好て
凡三十一代集の歌過半聞記をいて爲先大納言光榮卿ヨリ和哥のをしへを受て
詠奇妙 又鬚を愛すること仏国國師世鬚僧云宗祇ヲ賜ル延享
三年光宗卿関東ヨリ下向ノとき初て謁ニ出ルに其御ヲ見ル
羽ノ鬚を指ひい借ものへる鬚を愛するの有ると雖も長さハ六寸五ハ分侍ヲ長
の有ると雖ども長さハ六寸五ハ分侍ヲ長
凡ハ彼漢土ヲ名たる美髯候と雖ども関羽ノひげヲ捷れ
古今未曾有の鬚なりといふ賞した因ひ爾後貴人の学ヲ
觸ひし鬚を平生愛する甚し畏て剃て篋ヲ收家ニ
たへ今ニ存又其あ鬚のとく長ンを欲して是ヲ乃ヲ服藥
ヤ 宝暦六年七十七歳にして終れ今ヲ知て人ミ名ひげ云
ニと稱ス

ミ名ひきたる事にあやまつれ事先のたやうにん



玄洲

槲岩

大沢の里より八丁ばかり川を流を汲りて十二ヶ瀧と云あり松山の禁窟の下り清泉
涌出る沢の流れる所ゝの二條あり山羊暖く禁まて樹より棚引き岩三段下り
其間五六丈ばかり下の一段ハ嵩下の土穴にて岩窟とする所数箇所あり何れも狹く矮し
其中に径二間余り深さ一丈ばかりの窟あり此内に這入仰ひてこれを数るに木葉の形あり
廣さ葉の如くと覚しきまゝ家の頂格に画くが如く彫る如
愛をへ〳〵切取るあるを按に此地往古ハ平地にて木々の落葉ち変た
るゝを山崩れて落る土砂と埋るまに岩石ゝゝ三段ばかりとなり下に
岩なれハ変異の大なるしるし知られぬ

古陶器

本新町の里にて畠より掘出る物今の花瓶の如くにして忌倉なり

市川氏鋤圃得陶器其制甚古雅也而其埏埴之
年代不可得知就予乞銘之曰顯晦有数用舍待
人昔誰所愛今我以珍 曲肱道人書
明和丁亥秋四月

此器ハ安永中天神林村の内下香呂と云地
より穿出る按ハ居ること堅れハ欹又水
を入れハすく居水満れハ倒る故に或人是を家
詔に出る宿坐の器なるべしと云熊座云
里まても此器に似ること亦出る按に古代の
陶器口廣く底の尖きハ皆忌倉なり

素焼にして厚さ
中ハ朱を入て有よし

臼田相沢邦義藏

一一ハ廣きハ上古の酒ハ糟交まて今の醂醨醨とゝもの類と入れハ
の製を伊て清酒と成る

万葉ニ　祭神歌　齋戸乎　前坐置まし　忌瓮と　床多ニ居て　齋戸乎忌穿居云々

忌清て　醸せる酒を　瓮ゟ居て　神を初れる　見久老　邑志考

天明元年上塚原村ニて一民一邸を穿して平石ゟ一と穿発して　れハ其下ニ三尺四方と石ゟ囲ミ中央ニ底九き　瓶を立ル三ツの隅ニ壺一ツ宛有　各蓋有一方ニハ皿二枚重ねて有　何れも色黒く素焼のありくしまゝの如し

按ニ此上古の斎場ニて此器ハ即上古の忌瓮なるべし

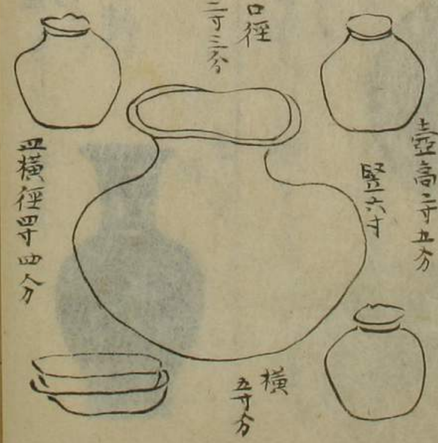
神事条談ニ日古ハ宮殿をたてゝ神を祭る為也

を立ずして祭ること斎場を設ること

場を申ス　ハ宮殿ニ代るべきの義ニて

なる陰ニ神宝及祭器を入る所を宮殿と云て

統ニ宮殿を社と唱ル成ル　庵ニて社と云い



土神ニ限れる我ハ社ハ神を社と云今又大祠を社と云ハ祠を不云と云わ古

と云ハ本神の義ニて主仁記ニ神庫此ニ云保玖羅一云ニ此又社の傍ニ神庫を立て祭

器ハ入ル所ニ為ル為ニ取出し社ニて祭ル事ハ古ハ神庫と

祠と思ひ違ふ事ハ古ハ

蛇石

山田の里ニ宗像明神の神体ハ石ニ古家雑記ニ曰建久八年二月ハ軍家ニ書上

信濃国佐久郡五城之図記山田の郷蛇沢の城主思阿茂光弟牧光五城本尾東西三丁三十

間三尺南北二町十四間余大門五ヶ所平城樋水七ヶ所城中ニ蛇石有神代の昔出雲国

ニ志多賀山の八岐の大蛇を素盞嗚尊の退治ニ成ル大蛇の一念を石ニ留る

十ヶ所ニ之根三尺ニ五尺堅四尺八寸　家臣堀井惣吉舟原吉助佐竹惣助

右ニ外家中三十軒云ゝ　又矢文天陳地十二石程

えれハ住吉ハ弁才天ヨ[illegible]ハ[illegible]や[illegible]石年経るまくらに形長く成れハ霊怪を祠を長く造りて[illegible]と蓋し長三間許之しハ彫く石長されハ茅屋を二尺余繕ふ
いつの頃か神祇道の官ヨ祈て一村の産神ヨ祭り宗像大明神と称するハ石質七尺
[illegible]ハ[illegible]三月八月神の巳の日を以て例祭の辰とす

按ヨ古へ蛇ハと呼しハ蛇の首を以て号山里を号る山岐の大蛇の訓とする文字を
山里改めて[illegible]ハ[illegible]ちとなれ蟒と云ハ兼名苑ニ云蛇之最大也又蚺蛇と云ハ
和名ニ[illegible]て別物なれも通して大蛇の名とせり

香爐岩

香坂村閼伽流山の麓ヨ堂ハ峭壁の下ヨ[illegible]別當ハ明泉寺と云閼伽ハ水の梵語ヨ岩
[illegible]水の傍ヨ[illegible]て閼伽流山明泉寺新ヨ院と号[illegible]や高サ五丈の碧巖列屏ヨひ
[illegible]東ヨ続き又五丈許孤立して峙岩あり[illegible]と六角岩と名つく行れの頃ヨや

あるゝん松峡仙人と云る人此巖の頂ヨて香を焼しとて香炉岩も呼て[illegible]
其上ヨ[illegible]山を仙人の岩と稱せ[illegible]孫の代の老木自倒れて六角岩の頂ヨ掛る堂ヨ
[illegible]ヨ枝ヨ縁り匍匐て岩の頂ヨ至て見れハ一箇の岩石物を蓋の如し取除て上を見れ
と[illegible]ハ何方よりか白き鳥飛来て妨ヨ故ヨ怪て[illegible]の枝を[illegible]
[illegible]て又其里の農夫の辺ヨて[illegible]の香炉の如きあるを拾ひ得て常ヨ炉の隅
ヨ[illegible]く次入[illegible]式時ヨ[illegible]の類駁者ヨて其家ヨ伝ひ[illegible]器を熟[illegible]
せんとする[illegible]主諸く茶湯と称[illegible]高人ヨ[illegible]て[illegible]
[illegible]ヨ拂て初其ヨ[illegible]ハ何る物ヨてやあるゝん

安養寺什貲

安原村寶林山安養寺ハ法燈國師の草創ヨ航海帰朝の後ヨ[illegible]て[illegible]
一開山ハ二世智鑑禅師ヨ管領記ヨ永享十二年足利持氏ヨ子永壽王丸信

濃国大井に蔵し給ふ此地より鎌倉まで持氏義久父子自害の後二男春王三男
安王結城を憑隠て籠城し結城落城の時春王安王生捕られ義濃国皇井まで誅
せらる四男永寿王当国へ逃登り大井越前守持光を憑越前守持光後改持光安養寺に隠
其時の住持は智鑑禅師の弟子にて持光の子なり永寿王の母と兄弟鎌倉九代記に
の兄弟と云へ其因よりて後に持光鎌倉へ歎きて文安二年鎌倉へ還る古馬頭成氏光
り世に古河の公方と稱し是より寺門繁昌して寺領二百貫文佛宇二十四ヶ寺末山二
百三十余ありて星移りて仏宇も荒廃し只鳳栖軒のみ存して其辺に退耕軒麟祥院光
明寺なと呼地あり未山も今四ヶ寺存するのみ二絃に法燈国師の宋国より將来のもの
菊の彩色画一幅あり又松虫と名つる磬あり響至てよけれ一度ならハ其音の轉
こと十度なり其跡長くひきて此一磬のみにて心経三巻讀終るとなり享保中開
山塔なるむきりとなつるよりて香炉と錫杖と穿出て甚古雅なるを外許多の什貨

有りしなれ共永寿王丸以来の物とて靴ハ宋朝より随身の者帰化して来る
中に陶氏なるハ工匠にて跡部の里に住して昌喬今須江と稱し此に國師の靴代々持傳
へ天明頃迄ありて野尻並木惟信の所藏なりしを此寺に寄附せり又境内
に鎌倉石と云あり此石むかし鎌倉より来りし石なりとて一握なるの石なりしを年
々増長して四人許に成りて古井の蓋に置るを次第に長て
今一丈余の岩石と此石の下を覗られハ井の形なりしなるよ

八す

相生松

安芸に松毬等に男松の実ハ
加茂羽の流に相生ハ相老ふ
井

岩村田の西長塚と云所の街道の傍に相生松あり一本ハ一本にして
二尺余なりて岐となる

相生の松

風早宰相

ゆ待乃松とよ名を

長塚の名代ぬるよりの

公雄卿

皓月輪

岩村田より小田井の間金井原にて径十五間許大さ二尺余圓く廿の長せる地あり
是を皓月の輪とゝなづく俗説に神の馬乘場とゝ或書に大追物の跡とゝ日村上判
官代基國が頼家公に射術の師なり頼朝公此地にて大追物修行有一時的場を二圓相
なり頼朝公馬上にて射給ひ梶原景時下河辺行平畠山重忠和田小太郎義盛以上五人にて
射之其節基国指南の役なり依之基國に上州南牧西牧にて五千町を賜る彼的場を
光月の馬場と云 今光月の輪 とゝなづくと云
或云安斎問答に騎射秘抄の序 多賀豊後守聞書に大追物鎌倉実朝公の時
始る由又云三浦介上総介那須野の狐狩なり始なり云説あり 又小田井なり追合の間大
窪と云所の岨に径七八間許にて圓く廿色別りて有る地あり 東海道後廻なり
尾の間なり山に一丁なり笹の羊葉に生なり不あり て名る物異の噂 許云伝ふ

なり同日の説なり云〻

月輪原上草萋〻　何歳か盤旋碧玉蹄
春草無侵馬行跡　于今歴々自成蹊

碓氷紅葉

碓氷嶺熊野の神祠の辺楓樹多くして第一秋の比紅ふ色大山く綿繡をまゝふる如
実に三双の糸色なるに又なる比山路をみちて錦を掛る如く繡を布る如
うすひ山行ては見あるに拾ひ捨ひ多ふの多るまゝを知るも 中院大納言通躬卿
山の名ハ碓氷ひとゝいとゝ山路にて色こき峯より出ふ
下塩さく〻ゝてはゝ旅路山陰るゝ月のあとの〻色ふ井 平松中納言時行卿

浅間山

古歌に浅間の烟を詠るハ古今集に言てれぬ歌ハ此山のあさましやゝ人の心をそ

こそやまあとゝなる始なれ山つゝみの煙もたゝのぼる事ハ大焼なり烟絶なるときハ
硫黄の氣地中よりもれ出て大焼あり山穴を釜をなぞらへ巡て二里ばかり天明の大焼より
穴ほゞ底と成ぬ日本記ハ白鳳十四年三月信濃國大降草木枯るハ其時
山大焼なり故なるべし

中古記右云天治元年九月五日左中辯長忠於陣頭談云近日上野國進解狀
云國中有高山稱麻間峯而從治暦間峯中細煙出未其後微々也從
今年七月廿日猛火焼山巔其烟屬天沙砂滿國煨燼積庭国内田畠
依之已以滅亡一國之噪未有如此事依希有之怪所記置也云々中御門右
大臣藤原宗忠之家記也

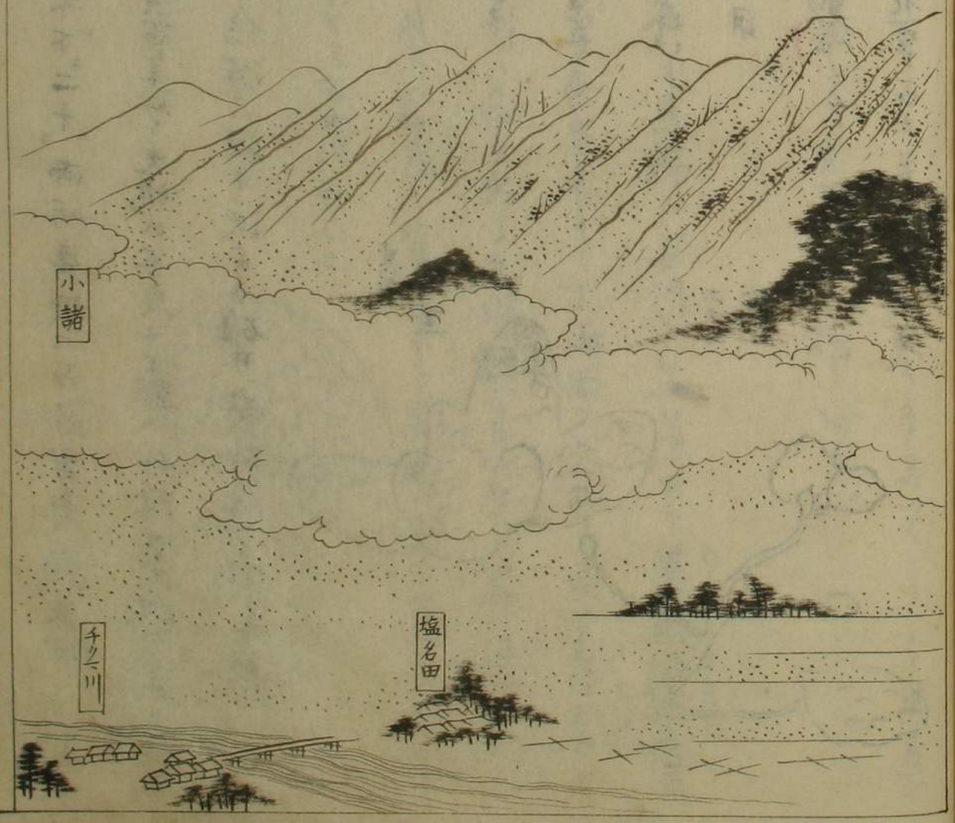
大焼の事後さゝくるを記せり或書ハ曰大永七年四
月大焼又享禄四年十二月廿二日大雪降つゝ六七尺廿七日大焼て禁二里程の
石の降る雨のごとし灰の降こと三十里ばかり九日大なる焼石を押出し禁の村々
流失すと云々今曠原ハ磊砢なる焼石ハ其時の漂出るなり正徳元年二月廿六日大焼
震動甚すして止む灰の降る事享保八年七月廿日大焼何事なり同十四年十月
廿日又大焼云々山煙絶穴埋りて平地となる年あり天明三年の春より烟たち
のぼる事殆なり五月廿六日大なる煙立中空に綿を重るが如し六月九日廿九日又
大なる烟立と云ふ音八ツ七月朔日ハ次第に音つよ六日に至ハ黒煙天を蔽ふ
震響百里ばかり八日山破れて泥水突発せり古今未曾有なり

漫游文草吾妻川焦石の記其略に曰天明癸卯七月庚寅朔浅間山陽
焔暴發五日甲午火焚山顛七日丙申大焚震動雷激沙土雨二十五
百里外山南数百里暗黑如夜沙雨而深三尺厥明丁酉山顛怒破泥
水突発巨石奔騰其泥飛沸流入吾妻川居民衝没瞬息之間一掃
凄粉破災之地自吾妻郡径群馬名和二郡至武藏中瀬焉以所聞

淺間山

菊亭誠季卿

為丸光栄卿



流没、民戸凡一千八百口、不下二千、両岸廣狭二百餘里、忽為赤地云々

天治元年より天明三年の間六百年ゟ大焼の毎度ゟ上野へ砂降事ハ出て西風

ゟ烟東へ吹ゆゑ信濃ハ狂井沢より碓井嶺砂降て餘ゟ雑

無名藥

浅間山中の日陰ゟ無名の草物を生ず

石南花の細根のごとく生ずるを生

次第ゟ長て寸余ゟ至り土ゟ離る五

月ゟ至れハ腐壊して味ひ苦耳すして

積聚ゟ妙なり風邪ゟハ二斤煎して用

ひて速ゟ発散を多く用る時ハ狂顛す

其外ゟも功験有ること人試されハ

其色 黄黒

土中ニ始形

亀石

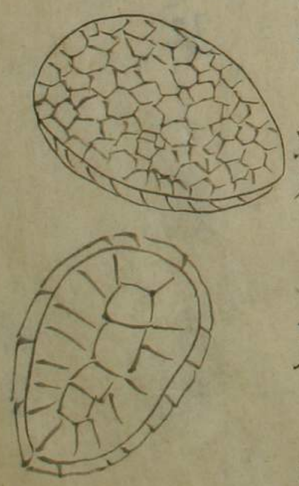
小諸の東口の枝道を加和と名づく其端ゟ乙女川と云小流ゟ暴雨浸水の後

土石動き迹ゟ亀甲ゟ似る石出る色黒赤して両面ゟ文あり長さ三寸五分て

凹首尾四足ゟ似像の物ゟ多ハ希ゟ出る文理鮮ゟ多ハ中筋低し

更級郡青地ゟも亀石を出せ共ハ筋高く背ゟ中黒色ゟて一尺ゟ

ゟ石質同ゟ乙女川ゟ岩ゟ同ゟハ乙女川の石ゟ



析文不滿尺藏六自天然

蓮葉下來後歳月知幾千　　江戸　行言

ふるくよりて伸するもそや生ぬ磨きあらえ石そ　日　至誠

ふる川代を隆てもわすや生せしふ姿てふ名の　日　宣風

駒形石

柳井の北に石嶺と云里に往古延喜の官道小縣郡多吉の駅より佐久郡沼辺よりに古道ふ之禄の頃土人の夢にうる石あるを見て土中より穿出とて石面三分ばかりに馬の形ありて地蔵堂の庭に立置駒形石と云小諸海應院先住観禅和尚賛

石嶺石馬図賛　静菴

維此神馬　萬古獨雄
原是歩景　何翅追風
昔出漢廷　自拱来東
爾来寥濶　影迹久空
浅山之下　石嶺之陲
堅砥隆起　再現雄姿
天劃神鏤　胡然作奇
郷人墓塔　避遇珍之
吾観其図　験氣難羈
千里逸足　名之與馳

額岩寺
大師堂
真福寺
釈尊寺

布引山
釋尊寺
圓通閣

布引山

布引山ハ望月の古馬場の北ニ聳て林麓ニ千隈の流を帯石壁峭然として千仞の墻如くニ聳ゝ岩壁ニ臥助ゝて布を引如く其のゝ凡ハ出石布目あゝて幾重ゝ中ハ布目ゝ故ニ布引山と名づく其下ニ布下と云ニ里ゝ山地より谷を流れハ板橋ゝ多く累ゝたる隈巖上ニ霞ニ又次ゝ谷を不通ゞ沢と云小備後の佐土原狩のゝハ近郷ゝ多くの人ま出く須加間の系より獣ゝを狩ゝて山谷ニ追入て取ゝ小備の方ハ將ゝ狩て山の南より下る観音堂ハ南ニ向ひ岩窟の中より造ゝて前ニ谷ニ別當秋ゝ寺ハ北ニ向ゝ其外茅師堂大師堂愛宕の神祠ゝ岩窟より造て出ゝ山地西山の巌石峙て狭ゝ所ゝハ山より山ニ入ゝ月の影ゝ間経ゝ所ゝ杜鵑の初ゝ聞ゝ夏之夜の暁ゝ猿の啼ゝ西行法師の涙ゝ搾ゝ詩ゝ山地の奇絶を賞ゝ例ゝ

下之条古物

下之条村の西羽明神の社壇の左右ニ古木像二軀あゝ左ハ貞保親王の像右ハ湯海國より帰化の人船代の像ニ云伝ニ此船代ゝ親王の師ゝて平生身従ひ人ゝ幽谷餘韻ニ云清和天皇第四子貞保親王館千洛陽滋野井ニ一旦患目ヲ因テ尋温泉ヲ而来信濃ニ居ル海野ニ而薨ス矣後乱相接而城海野ニ故氏海野ヲ而姓ニ滋野ヲ往古滋野氏望月在城の時近辺七郷の領主ゝて左衛門督皇義其子皇隆の石碑山部の津金寺の後山ニあゝ大ゝ五輪の面ニ梵文ゝて建仁義久の年号ゝ近年又大碑ニ立く其事を記ゝ其略ニ曰

望月氏出於滋野善淵王王乃清和帝皇子二品式部卿貞保親王之孫也王六世之孫重道有三子三人一ニ曰廣道居海野二ニ曰廣重居望月三ニ曰道直居根津各以其封為氏是稲滋野三家世為信州之巨族矣廣重玄孫重義属鎌倉矣将麾下

貞保親王之木像

長二尺五寸

梅和漢三才図會所謂道服之像也道服之名見續日本記饗東秘抄云其製與直裰同本出於僧衣似尋常浮屠黒衣而背不加月形者也冬ハ則用闘緞七絲緞夏ハ則用紗其色不定大臣至極褻着之被爲帽子呼曰烏帽子道服云々又尼碟雜考有道服之異說

原来刻造ノ亡ニテ粉ノ跡ナシ風濕ニ晒テ灰白色也百年以前迄ハ冠着ヲ有シト云傳レ氏冠ハ相當セサル支也今髻ノミアリ

渤海國歸化人船代之木像

長二尺

聖武天皇神亀五年渤海国使来貢ス此高麗ノ部類也元年高麗為新羅所滅残黨ヲ號ス渤海國ト光仁崎峨仁明清和宇多醍醐之朝ニ絶来貢ス

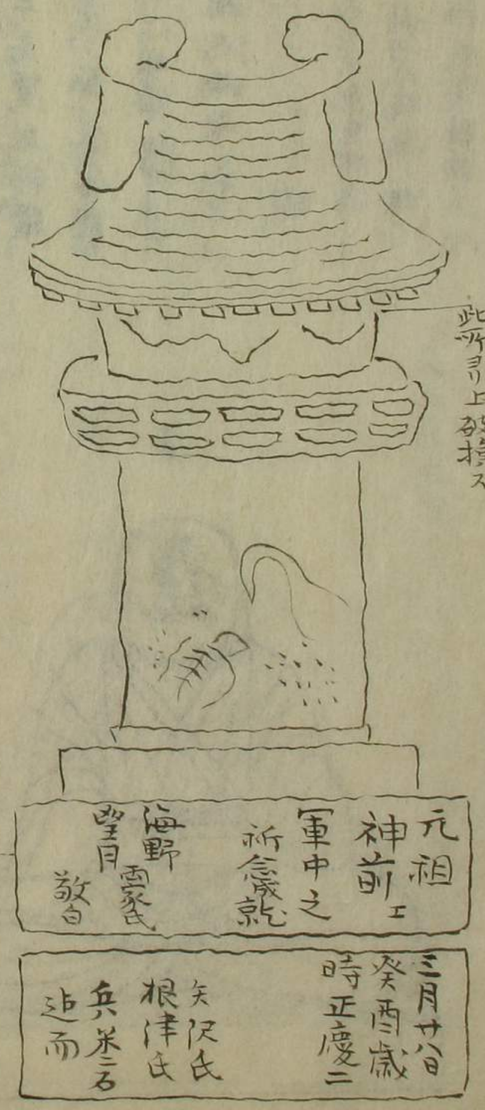
五代史巻七十四夷附録

第三曰渤海本號靺鞨高麗之別種也此語據ハ疑ラクハ渤海靺鞨ノ轉語ナリ

陸奥国多賀城碑所謂去靺鞨国界三千里トアルモノ考證ニソナフレ今ノ里数ニテ五百里ナリ

口ノ左右ニ牙ヲアラハス両軀トモニ手ハハキメヨリ離レテナシ

或書云小縣郡矢沢ハ新田義貞三屬ス觀應貞治ノ
頃矢沢ハ高住海野ノ分流也矢沢右馬介教滿永享
年中結城合戦ニ出陣小縣郡内百六十貫領ス



久代下之条も望月氏の采地ゝて両羽の神祠 別宮原の宮ハ八葉明神を望月
氏ゝ先祖貞保親王を祭る所ゝ慶長中野火の為ゝ神祠炎焼ゝ乃ゝ両軀ハ
神像をハ本祠の社壇ゝ安置ゝて跡ハ放ゝ下ゝ苔ゝ古石羊ハ年ゝ悍れてあゝ近年掘出ゝてゝ祠の如く石焼臺の
如ゝ其快ゝ古雅ゝ柱石の三方ゝ松竹梅を高彫ゝ一方ハ鶴亀の形
かゝたゝ臺石の三面ゝ彫刻あゝ元祖神前とゝて正慶の年号あれハ此
像も其以前の物ゝ

墓闘

中居の里の三丁ゝ北往来の道の西ゝ諏方の森あゝ乃ゝ東ハ地かゝゝて径二間
長さ三間ゝ水沼ゝ深き一尺伊這ゝ文政十年癸巳四月十日の夜ゝ入て里人其
地を通ゝしゝ水音潺潺ゝゝれハ怪ゝ思ひ人ゝ墓闘ゝて闘形快ゝ

翌日くれハ三丈斗なる蛙を破りなを噉切なりて食ふる事ハ其骨
ふくさまりてくだりて南西の山なる墓の下なる岩穴くさ状なるハ七八寸ハ四五
寸斗なる色南より出ハ赤く西より北出ハ黑く池の南北ハ分れて集りなり凡
四五百許先大なる蟇池の堤を回りて本の所ニ三丈水なりて
噉合次第ニ出て後ハ池一面ニ入乱れて噉合故ニ三尺ハ冷ニ無之ニ三
丈ハ死なる山東徒ニ出て夜ニ入群をなし皆提灯を照して入る如紫
なる十夜なかくなりしニ一夜童男炬火を振て大ニ騒きれハ漸ニ減しニ
此なりなる蛙合戦なるなる昔なる蟇の如く集て噉合こ
ハ帝なる

皇の下る牧命なるを聞て安元中怪異なりて闘なるなる人侍れて
其事なの怪なりこ

本朝通紀曰桓武天皇延暦三年五月天王寺、百姓合月七日墓ニ三万許長四寸
其色黑斑従難波市南道南ニ行て列可三町隨道南行て入ニ四天王寺内

分ニ殘合可ニ三時至ニ於手ニ時悉散去云ニ

農夫異行

行倉の里ニ安右ニ衛なるなるなる者ハ報なる事て至孝実直類なり其父次左ニ衛明和の頃
世を辞め安右ニ衛ハ衰て周維の設おごそかに後の縛なる怨ニ行ひ終て後興東
の門ニ立印の有なるを其妻の取除ンなるなるなるなる曰其印此度吊ひ来まり人なに
知なるなるなる猶異の者なるなるなる知なるれハ今更百なるなるなるなるなるなるなる
一なるなる田なる畠物なる細なる頃ハ特ニ妨なるなるなるなるなるなる竟ニ隨即亡ぬ爾なる万事父
在世の行ひなる些なる改ニ縄なるなるなる芝織なる結なる度なる定めて居なる田畠なる耕
し畦作なるなる標なるなるなる木なる石なるなるなる其所ニ至れハ休なる午なる貝吹なる午飯なる食ハ
人其以所なる同ハ我親信敬なるなる者ニ居間の外面ニ椽なる清なるハ如那の習俗なる
なるに角木なる立て他なる家なる殊なるれハ其妻なるなるなる椽なる捕んなる欲なるなる

父の一代かくて有るあるを我何ぞ改んとて貴尺又其父人を金五兩を借るが免角
七年に利息の償てるる其後野も稍是けくるられ債主より促しるを是い
父の五年時に借り金をうされば我世のかぎり又かり返るべき物なれかてあんん
うちハ貸給るるとて逐年迫ざれるを利を射るるよハ世のるみくるも多く償
ひられハ債主も幸るみるあるるこハ元父の西郷と忘れるく墓に志の切るる後子
又生涯の行状如此有られハ其徳子孫に及て富ハ家と潤くるん

婆良小屋

春日の里より一里ばかり谷川を渉りて婆良小屋と云あり其地岸崖壁立るを
四丈余を岸崖に五寸許に穴ある穴三あり是ハ有りの巣るりと云あり崖上ハ平
原にて茅茂り絶崖るり二間ばかり引入く一丈余の坑る其回ハ土人と茅を刈た
迫るるの有寛政中州刈の者窟に坑中を窺んしに一丈余り底ハ明るえるる

いるる故と云ふを聞ハ坑ハ村長と告警日村長数十人を引て梯を荷い
術を携る其地に撞り先坑を廣るる崩落んるを懼て二重に縄を結び数人
を以て入れ梯を窟に下して底に到坑を廣めて三間の梯を下して又底に中央二間四方に岩
と切て梯を窟に明るる亦蕃るる又底に狭き穴有て梯を曲れ漸梯
歩して入れハ又窟穴あり九尺三間ある明るる有るの巣るるるハ窟穴
ハ昔擾乱の世に強人の不虞あらハ窟へたるる設なるるるるるる
菊牡丹を古根るえ有て空る年く花咲るる此中に特の物有るの錆ハ
廣る四十枚銚る而古鏡三面又一箇の甕の中に傍の寸法の形の牛
三ふる物るる 仰て三尊の殿皆田弘所藏

立科山

三代実録に菊科

此山八ヶ嶽よりて信方小縣佐久の三郡に跨る頂上る神祠あり陽成天皇

元慶二年叙位のよし三代實録にみえたり六月八日より七八日まて登山して就中十五
日当山の人等し何方よりきたるも五里程より故に山中に一夜をあかして山峯に雪の
降積るより外山よりも早く春にいたりて解るも又遅し遠くて見れハ飯を盛たる如く
それハ飯盛山ともいひて巓ハ渾巌石にて松西に延回て根も赤もろきか如し葉ハ
姫小松に似たり俗に延松とも云此巌石の間に多くありて栖むたぬく出て携ふを宅山の人ハ
よするあり加賀の白山に雷鳥と云に似たり雷鳥ハ其山に雷と云虫ありて蚊蛙の如く
許の者好て彼虫を食ふ故に雷鳥と称ふ大さ鳩のことく形も又鳩に類せる
もし奈簑か岳駒か岳にもありて岩鳥といへり
このふ山の松の木みにかくろひてやとりにてそのある雷鳥の名あれ　後鳥羽院
あられる越のきたる峯にもむかしも松をとめて衣をあたへらる　家隆
一説に大明一統志に載せるところの松雞といへる古本にハ松雞とあり按に乃
本にハ鶺雞とありこれなるへし松を栖とする故に松雞と名つけたるなれハ
和語にも松とりと詠あいぬへしといへとも又一に鶉鳥と書　鶉字ハ爾雅に出
伊藤長胤か記を影写せる印行の画あり此山のものにおしの差ありこの山此
鳥ハ雄のかたち黒色に白斑あり碁石雞に似たり雌ハ黄嶋雞に似
むねのうち黒く白斑あり足ハ趾のきハまて毛あり雛ハ鳩のことく松
実松のみとりを喙とえり又此山に雷獣あり住む故に雷岳と云
あり其状小犬の如く毛ハ貂に類して眼の周り黒くある様細く
下唇短く尾も短し跖ハ皮厚くして小児の足に似たり足甲五本あり
鼬の如く爪ハ穴を穿て土中に入る故に千年鼹ともよべるよし常には
軟弱にして人に狎り雨ふらんとするときハ狂猛にして當るものを裂く山
中陣頭雨降んとするときハ岩上に踊り飛て雲に入て冬鉄の如しとそ

この二附箋は井出宿の立書と見り

雷鳥

雷獸

延松の中と雖ども甚だ多くあるなり五十年ばかりにして稀に花を開く山地にあり稀の物にして異木なり一処にも吉野山の桜に類せり

高寒に堪ざるゆゑなり花を保世に多くはなれてゆえ有すなり発初め

旬

下旬より稍蹙るなりとに花より外に実なし

山中に耳露梅と云ふ

花は黄楊の如くして大ふあり大なる実白く小なる赤し採て嘗れば味ひ梅の如

不老草は常世草ともいへり諸毒を治し瘟疫をとらず檀桜槲は枝うて中風痿癖の病を避ケ小児を保て驚る痫の煩を除く其外異州多し藥品は黄蓮

人参中に柴胡は絶品なり一年糠尾村の醫生宮原某採茎を登て又出し採て試るに功能他に勝れり因之京都の物産家に鑒定を請に海内第一品と賞して

往古より柴胡は漢渡り銀州の産を銀柴胡と最上とすれども得難し易所

故に舶来の物なり和産にも二種あり沙柴胡は大に別なり

雷鳥

雷獸

延松の中と雖ども南くなるに五丁ばかり行て柳谷と云あり山地なれども柳の如く異木多く然ども吉野杉に風情まさりてこれを數年

なる芝高寒に堪ざるゆゑなり花を保世の為にすれども育すれば発初め

下旬に至て稍蔓なれども花に花なり外に赤色なれども黄楊の如くして大ふあり大なる実白く小なる実赤く揉て煮れば味ひ柿の如

不老州は常世草ともいへり諸毒を治し瘟疫をとらず檀桙槲は杖にして中風痺癖

の病を避ケ小児を保て驚る痼の煩をとゝのゝ又其外異州多く藥品は黄蓮

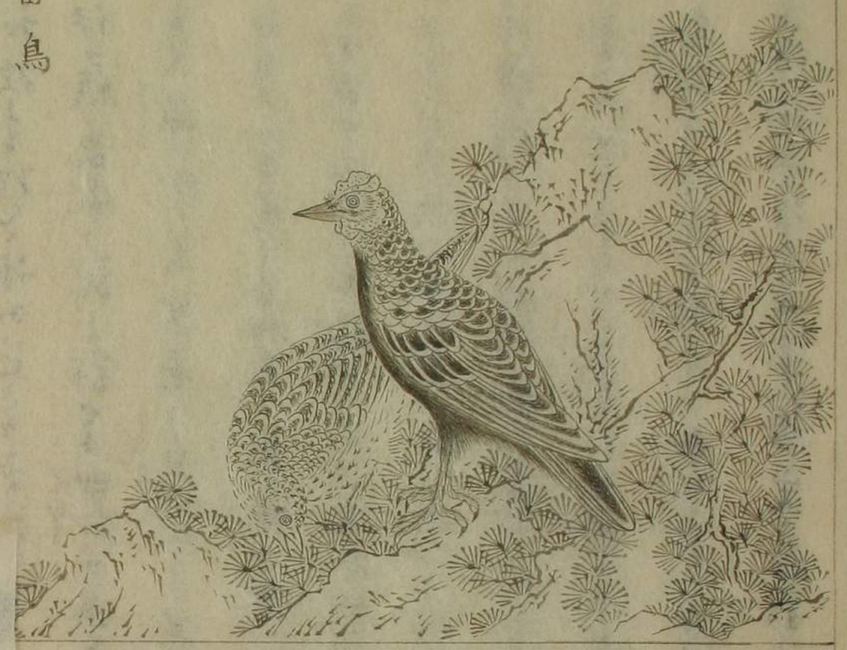
人参中にも柴胡は絶品なり一年糠尾村の醫生宮原某採茎を登て又出し採

て試るに功能他に勝れり因之京都の物産家に鑒定を請に海内第一品と賞し

往古より柴胡は漢渡り銀州の産を銀柴胡として最上とす又也て得ること易

き故に今舶来の物なり和産にも二種あり此柴胡は大に別

雷鳥



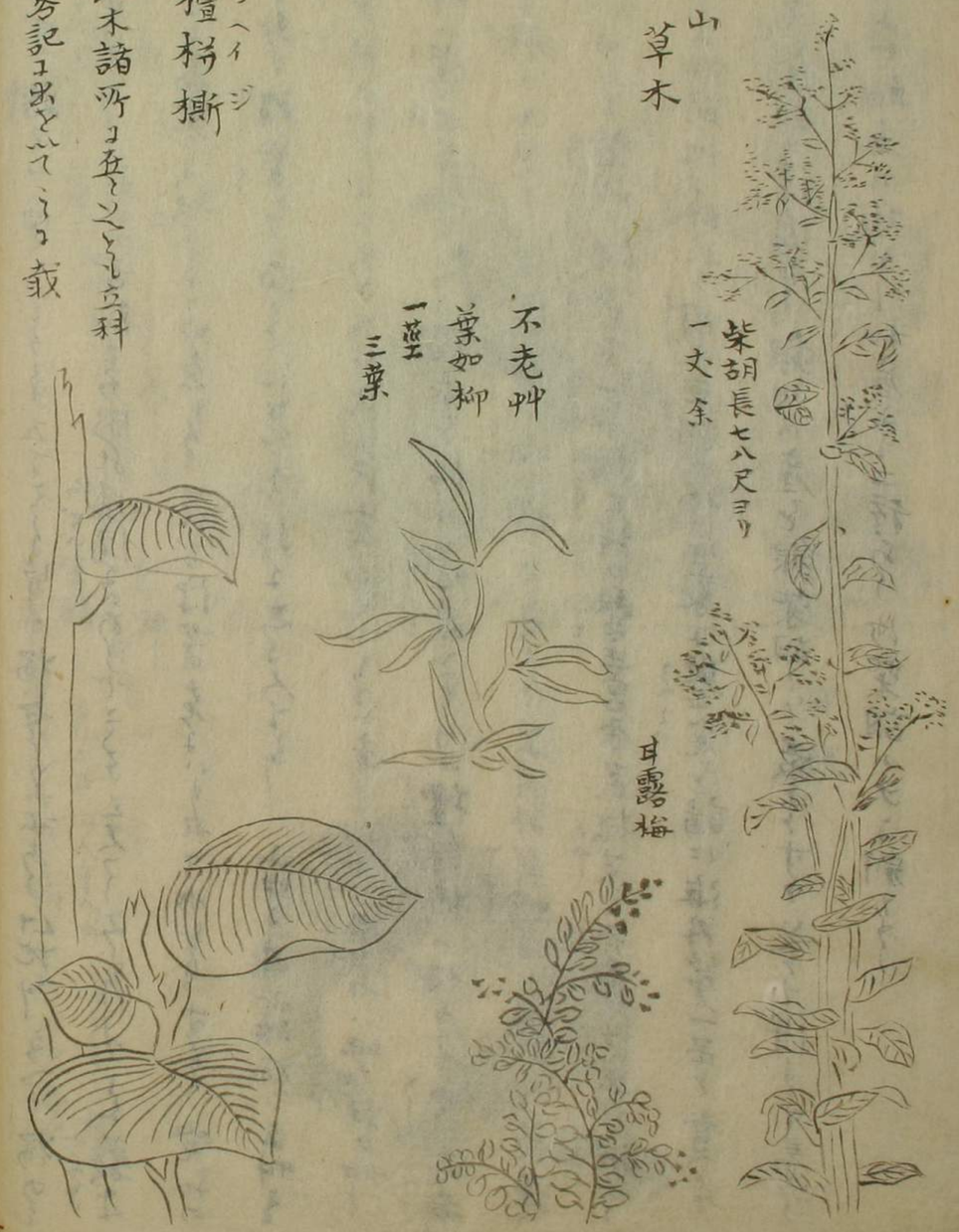
雷獸

延松の中と雖ども南くなるほど五丁ほどなれば
ほのぼのと見えそめ迄ても吉野なる時は
なほ高寒なる地なれば花を保ち芽ぶきなれども発初め
下旬なれば稍蕾なれども花とに花なれば
山中は露梅と云ふ
花は黄楊の如くなれども大ふあり大なる実白く小なる赤し
根を嘗れば味ひ梅の如し
不老草は常世草ともいへり諸毒を治し瘟疫をとらず檀桜樹は枝なれども中風疼癖
の病を避けず見えを保て数る痼の煩をとらず其外異州多く藥品は黄蓮
人参中も柴胡は絶品なり一年糠尾村の醫生宮原某採茎を登て之を採
て試るに功能他に勝れり因之京都の物産家に鑒定を請に海内第一品と賞さ
往古より柴胡は漢渡り銀州の産を銀柴胡と最上とすれども得難き易
き故に舶来の物なり和産に二種あり沙柴胡は大に別

雷獸

延松の中を踏て南へ五丁ばかりにして柳谷と云あり山地にて柳の
多く異木多し然れども吉野ほど風情はなし
ほそ高寒に堪ざるゆゑなり花も淡紫なり花も淡紫なり
下旬に至て稍蹙るゆゑに花も外よりも人ならず　山中に露梅と云ものあり
黄楊の如くして大小あり大なるは実白くふるひ赤し採て嘗れば味ひ梅の如し
不老州は常世草ともいひて諸毒を治し瘟疫をとらず檀桂橅は杖にして中風癖
の病を避ける思ひを保て怒る痼の煩をとゝのゝ其外異州多し藥品は黄蓮
人参中にも柴胡は絶品なり一年糠屋村の醫生宮原某採来て之を出し採
て試るに功能他に勝れり因之京都の物産家に鑒定を請に海内第一品と賞し
往古より柴胡は漢渡り銀州の産を銀柴胡と最上とすれども得難し易
き故に舶来の物にて和産にも二種あり沙柴胡は大に別なり

立科山
草木



檀(ダン)桋(イジ)撕

此木諸所ニ在ルヨシ立科
男記ニ出ヲ以テ云ル載

小縣(ちいさがた)郡之部

四阿山(あつまやさん)

四阿山ハ上野の堺ニシテ此辺の高き山ハ何方ヨリ見テモ屋の棟の如し故ニ四阿(あつまや)と名く山東ハ上野南ハ小縣西ハ恵科北ハ弁彩ニ分れ高く峙れり其間より空ヨリ落ちて三国を流れ下りて路ヲ一丁毎ニ石祠ヲ立て左の方ニ中央の岩室ニ園成の御姿を長さ七寸ばかり中ニ三像あり大已貴命の神祇ニて地主神ニて此所より西を望めハ屏風山ニ云あり徑六七間ニ高サ七八尺褐色ニて文理氷裂の如し夫より絶頂ニ至ル二祠あり東ハ菊理媛命ニて上加祠ニて西ハ伊弉冊尊を祠ル信州祠ニて其間ニ岩石を穿て風を除く此両祠の央を信上の堺ニて六月十三日諸人ニ山ス此山常ニ雲霧深き冨士ヨリ見ル頂上より見ル所ハ隣国の高山凡十二州ヲ望て皆人ヨリ中ニ子の方ニ高りて為山岡ニ不北向ニ立る烟霧の中仙境の山雪ヨリ堂の如し

國分寺埋木

聖武天皇天平年中諸国ニ國分寺と立れ一國僧尼の司たり　聖武記曰天平九年詔天下諸国国別令造金光明寺同上年令造法華寺云金光明寺ハ国分寺ハ国家鎮護寺法華寺ハ国分尼寺ニて法花滅罪寺之建久三年修復破壊の支東鑑ニ見えたり毎年正月八日より十四日まて最勝経を読誦とかゝ正月八日ハ諸人詣て蒭民将来の守を買れと八日堂と上見古の遺風なり本堂の内に三重の塔あり　古造七重塔逸書ニ金光明経一部安置塔西ハ蓮池なり此池往古一宇の有り近まて掘立造の柱池中六尺の間て一本裏ニ云ゝ焼杭なりあり文化十年の変當寺主これを抜つけて穿出しなる長さ四尺許太さ径一尺余上ハ黒く焼杭あり下ハ角なり尤古木なり色つきて朽ちなれ共ハ板ハ撓しまた白色桐の如く木理ハ檜のごとく香ハ杉の如くして其辺好事の者ども切て一遍額とし或ハ筥ニ作りて愛玩ス　曲亭馬琴に額あり香川景柄哥一首を云前出畧

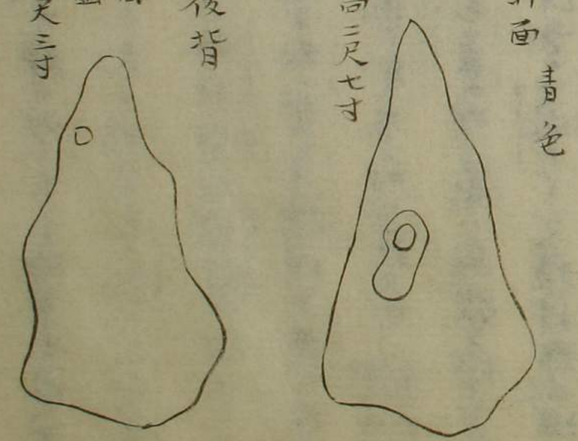
烟もなき秋なりけりなれなる世ふりぬるかなれとそ見る　黄中

將門記　兼德三年之古書也

兼平八年追貞盛ハ條ニ曰ク　率樂ノ百餘騎之兵ハ火急追征ハ二月廿九日追著於信濃国ヶ懸郡国分寺之邊便帯ノ千阿川ノ彼此合戦間無有勝負厥内彼方上兵ハ池田真樹中矢而死ヌ此方上兵文室好立中矢生也貞盛幸有天命免呂布ノ鏑遁隱山中云ゝ　右ハ切左ハ反

鳴石

文化二年四月上田の西諏方部村の人ゝ相誘ひ産土神の社地を展ひ石を運ひ曲河原より石を運ひ水中より一箇の奇石を得たり丈色青其形三角上鋭下平にして彼文字中ハ凸き不あり形胡蘆の如し上辺ニ穴あり穴中法螺の緒ゝ入れを吹ハ鳴声呼囉の如く五六



丁ほど四里人異石多し社地は安置し注連を曳て神の如くす頂を近付しなへてうう者日々に市の如し今は城中の物とうう

虚空藏山

塩尾の上に虚空蔵堂あり別當東福寺山の手腹に又一堂あり絶頂と奥の院と云へども堂は只一株の無名木あり幹は椎の如く葉の芽出る時は蘇の如く蔓出る豆豆の如き莢一つともなる家年を又は山に秦サルあり葉は毛莨の如く花は鳶頭に似たり亨保中朝鮮の苗耳てうう今諸所に多く作れとも此山は固あり又埴科郡の堺ふ砦跡あり天文廿三年甲州武田家より山砦を龍衣取多田三八後に淡路守と在番として置りしが或夜風雨烈しく物音騒しうりれは庭に出て見ふ何者もなし只三八が髪をつかみて引揚んとせし所を力を拔く其手を斬て落りし其物は何方へもなく行方知れすなりし彼手い大きく鷲の足の如くなる物なりしとて今其辺に又鷲有と云山続き水晶山に鷲岩と云岩有数百丈前に立る中腹の松木に巣を作て常に居るすし

匠人嗤蛇

亨保の頃上田房山村に五郎右ヱ門と云大工あり城中の普請修理の所工匠の数を命せられ夏日休息の暇同僚と木枕を排して相戯る長剣に勝者に翌日枕を大杖に至七八人これに踞り一人五郎右ヱ門に対してこれを牽に優劣決せ八五郎刀を拔てこれを牽ハ踞者皆接さまに倒れ枕五郎に手をあり是ハ柔容に謀て釘て枕を大杖に手付にて諸人打て其膂の力を称せ又一日休暇孔に百間塹に浴して暑を避く五郎浴し游泳出没して戲る忽蛇有繞て腰脚を咬禁すれとも五郎素空手刀又なし故に蛇地の首を抱崖に投首を噛断塹水盤盪て紅なり五郎等悲愁に堪ずして慌く更に術なし頃あり左に蛇の首を握く浮出左手に游岸に上る顔色常の如し人皆其勇猛を感せさるなし城主より其勇

賞しのらて賜あり又其ゝ歯を鳴せ僻とうて人ゝ應対談話の間
ゝ歯を鳴せとくりかくて其年ゝ十七年を経て死せりと云
或説ゝ山ゝ入蚰蜒を入て迯帰りて病伏終ゝ死しゝ考あり然るに此中ゝ
ゝて蚰蜒の首を噬生ぐるき所を生ゝ此の強雷ゝとゝ宮ゝ潰歎ゝ

獅子踊

上田の獅子踊ハ相伝て云古ゝ此城を築の時人夫等戯れゝ踊とゝて笛を吹拍の
拍子を入地固をなゝるゝ遂ゝ恒例ゝなゝ今ゝゝゝて毎年祇園会ゝ常田房
山の西村ゝ出く城内の屋敷ゝて踊るゝ其ゝ形状先烏帽子に天狗の假面
をかゝ大刀を佩径五尺斗の團扇を持るゝ一人是を祢冥と云ゝ獅子又此
ゝ背ゝて黒き鄰の尾をさしゝをかゝ腰ゝ五色の帯帛を挿ゝる方なり
小團扇を持次ゝ忍鄰の尾鄰ゝ微形ゝ物を載き眼ゝ鼻ゝゝの假面被
かゝ者目ゝ鼻ゝ穴ありて口ゝ開て舌あり又人中の下ゝ口ゝ付て
くゝ中ゝ之首ハ泥貝ゝ完々あり厚紙ゝて鼻を造り冊をぬりたり六人ゝ鉦鼓ゝ
を打続て十人各下ゝハ裁つけ時ゝ之外ゝ花笠かゝ被ゝ提灯ゝ持ゝ
鄰ゝ尾ゝ花笠ゝ提灯ゝ共ゝ五色ゝ竹ゝ五色の紙冊を付ゝ
を持ゝ有ゝ是を中古ゝと云

感馬

孝子ハ國中ゝ許多有ゝ保表賞ゝ受ゝ者ハ孝義録ゝ出又ゝ有ゝ上田
領の内ハ封内孝民傳一巻ゝ此伊ゝ出ゝ孝子ゝ十六人ゝ又更級郡今里村の岩
女ハ母ゝ孝を尽して生涯の若身養談ゝ尽ゝ保賞ゝ受ゝ
坂本ゝ岩撰氏の母ゝ子岩女ゝ傳を著ゝ此ゝ孝子を表すゝ枚挙ゝ遑ゝ
されハゝ又異行傳一巻有ゝ善行の者八人を載其一ゝ示良本村ゝ次郎兵衛と云
者ゝ兄弟を次郎左衛門と稱ゝ父ゝ人ゝ朴直敦厚ゝ家内和順ゝ帰里

常田獅子踊図

房山獅子踊 唄

〜ごりんのまきのごんざく〜
ごんぐよぐるぐさいたとな
〜たるのもぐれもとまきあけ
よりさらをあるうけよ
〜よりきてこれのおふいをなが
もれいごりんとぐ〜やせうや
〜うえ
〜もいるぐかりけよ
〜もいつりふかりぐふいぐやあう
せよ
〜よりきてこれのおうあや
なぐもれいいろもたえせぬ
こうぐせんびき
なぐもれいあぐあうげて
おいとあるうしてもぐれてざうら

先ハ房山獅子の唄なり

ごんざく〜ハ御榊ごんぐねぐるハ
黄金(こがね)の花 〜よりきてハ
あり生て 〜こぐごんざやハ
黄金の小草 〜もなけうつけよハ
もあるまかりけよ 先ハ昔ものてふまの
皮かて幣帛の形ち
ちるる和を作り紙きの紙もる者の
持くる之今ハ房山の市かて五色の
紙かて作る

〜もいろもふかりぐふハ いろそかと
げんのよるるるなる〜と上田の
医生宮下可年いり
此ハ図もるハ常田の獅子ハ房山の
獅子ハ〜出ル大同小異あり唄
も常田ハ小異ハり

小睦く近郡の者ひとり辛言あるを聞ず支大ふとく村長の命ぜ而ハ畏敬て守て
敢て背ク事なく嘗く村長に請て曰毎年秋の租七月の初金と以て上納ス村老
故をとハ曰公税納まれハ田も吾有なりと又同村藤五郎といふ者の男伊助を租
二石一斗外獲てまた半ばを田ふ輸る男を磨龍の巫ふを問ハ曰く
私の債を償まれハ新来先祖ハ薦ぐ一いとんや家人敬く嘗んやこと農時の
隙まハ薪を馬ハ駄て上田ハ行てひさく乗往十里鞍を飲くあまたを牽くを
物を犯んを慮くるを恐を陵るをきハ跌をとられ墜るをもれといふ人を遣
ときハ抵るをれ冒をとられとハ夜寝ハ寝ハ厩ハ行ハ白ひく熟寝ハ
叮嚀親切人と語ふ如ハ或き駅ハ来を畜ハ馬を互勝駿て控制を受ス次第
を情父子をつくハ耳を弭れ尾を掉く常の馬ハ異なるハ後れを人ハ変ハ
驕驚ふ故ハ後ふとく素ふ神仏を崇信て朝ハ拝礼を知れを是を

以て農支を妨ふ事なく文化四年六月領主ふ米を賜く其志を賞し故
ゆへとなん

南唐の陳氏十世同居して家族七百口毎食廣席を設長幼次を以て坐く
共ハ食を田丈百餘ふ一穴を共ふして食ハ一丈至れハ諸丈れ為ハ食
ばを六至誠丈を感ぜふ今次ふ父ふハ至誠馬を感ぜと謂つ

魚胃石

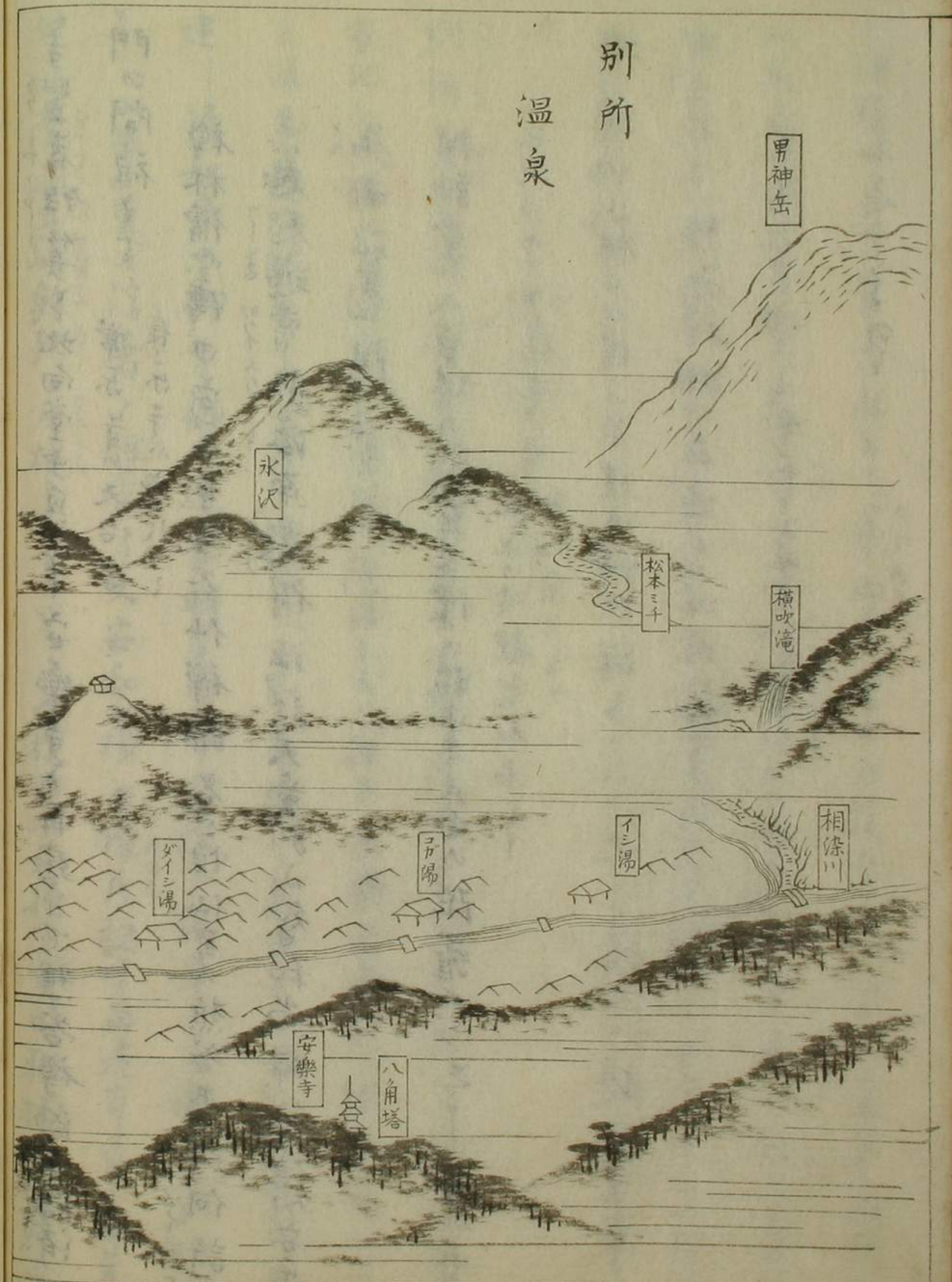
日向小泉の大日堂ハ相傳延暦年中
坂上の田村麻の建立ふて天照山山海堂と
号別当ハ真言盛覚山高仙寺此地ハ
蛇河原とふあふ山沢の奥ふふ山海
堂の禁二丁ふをふれ材の中を接き

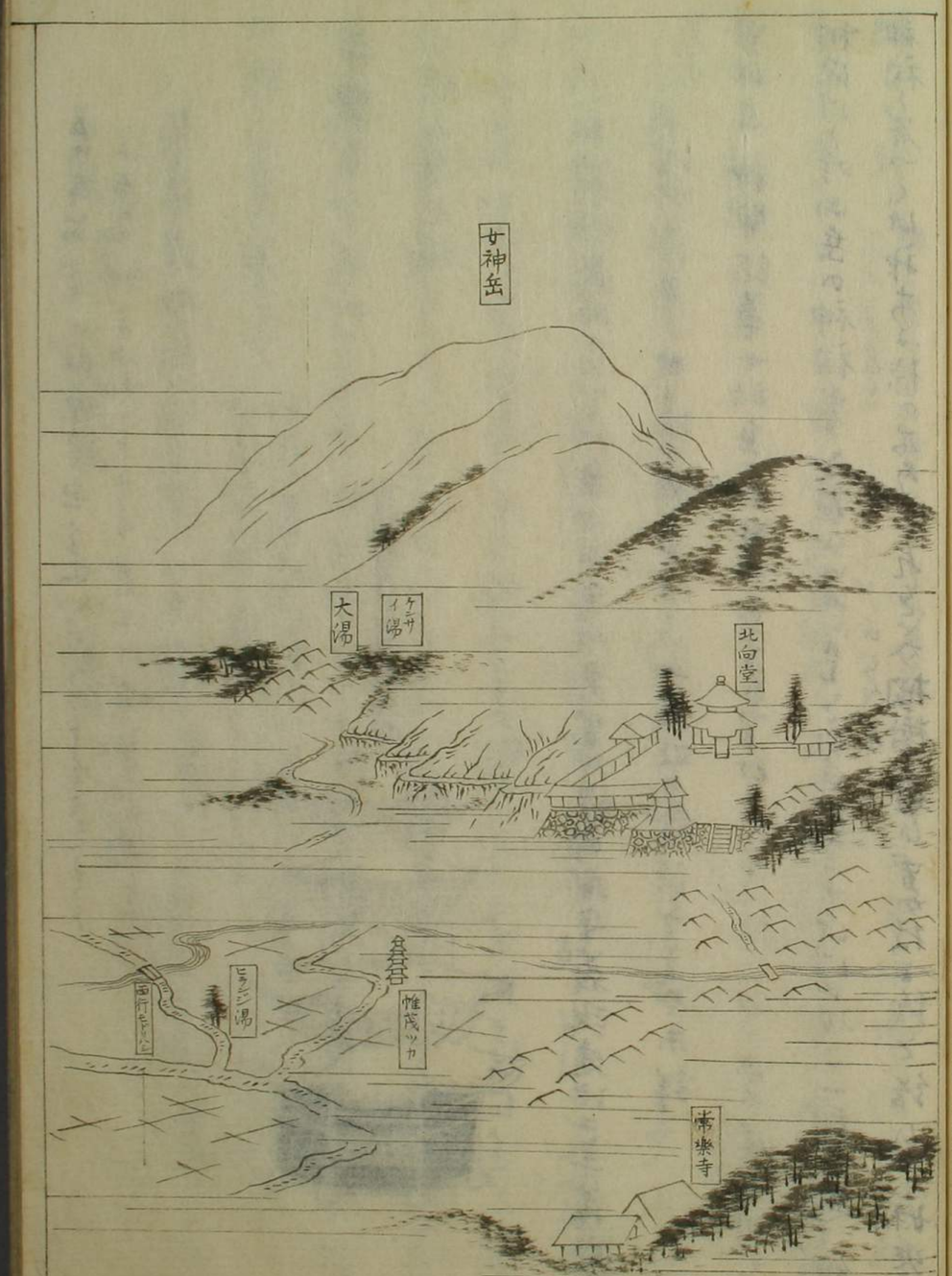
て陣野川より常に水あり暴雨ある山水岸を浸し川に流出し
石黒をみて板の如く岸に行る間蝶蛇の性あり土人むで石と名て慈しみ
蝶蛇あり其魚胃の跡あり諸人吉岩端に集て此辺に集しと
く見て含むものあり

出浦

別所ハ原出浦の御堂と観音堂の有地と院内と温泉四所と五茅所堂
有地を大湯と温泉三箇所院内と云ハ往古長樂安樂常樂の三寺にし
を後天変に焼失して名のみ傳て寺記に云天長四年又三樂寺と再
建し清和帝の御宇勅上蓮華明星西尊の四院と造立して三樂寺の別院と
なり八角四重の宇層を經営す又安和の頃平惟茂諸堂再建有りと木曽義
仲の付林九郎兵衛餘殃に灰燼となりと云其後北条相模守貞時執權の頃常楽
寺竪者性筭を北向堂中興し安樂寺を再建して樵谷禅師を臨済禅
門の開祖とす　常楽寺ハ天台宗　長楽寺ハ密教云々
禅林僧宝傳に曰安楽寺樵谷仙禅師名ハ惟仙号ハ樵谷ホノ詳何許人
志趣超邁嘗航海南游得法於天童別山智和尚帰住信州安楽寺
為開山第一祖ト云々
祖師堂ハ八角塔の北に五木像の胎中に八句の陀羅尼と云嘉暦四己
巳九月十一日造之と有　文永の頃観叟和尚曹洞宗と云
塔ハ境内山林の中腹に有建立時代詳ならと云ども境内に護摩堂畠と
所々あれハ樵谷禅師の再建以前の物なり
黒漆を塗る多不ると雖サーと
黒色のうるのと

別所温泉

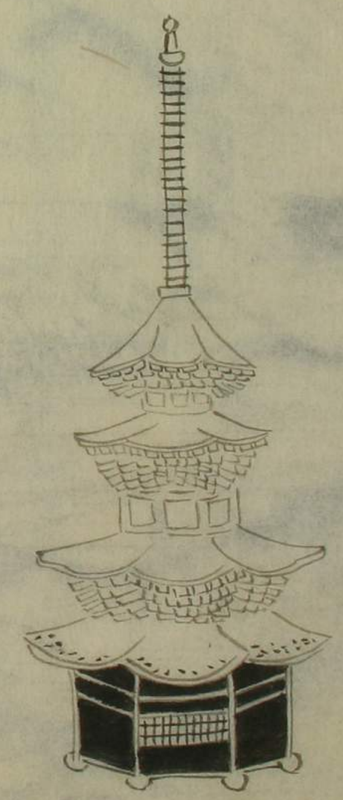

男神岳
氷沢
松本ミチ
横吹滝
相染川
イシ湯
コバ湯
ダイシ湯
安樂寺
八角塔


女神岳
大湯
ケンサイ湯
北向堂
ヒラシン湯
惟茂ツカ
常樂寺

五十年前まで八麻布にて包みたいさつのこてこんこと
小屋の下組の四軒さきにて其工可嘱ゑくの又ゑら
ひなき遺物なり

安樂寺

八稜四層之塔



或曰北條義時の三男陸奥守平重時の三男北條武藏守義政建治二年落髮し
て信州に閑居せり世に塩田殿と号せり此義政の餘沢なるやも詳
男神岳八伊弉諾尊女神岳八伊弉冊尊なるべし山より流れ出る水の尾合川と
相深川と呼両岳の神祠峯を並べて八川の辺に一祠を造り結
神祠と名づけ神木に椋の木あり之れを茅楯樹と呼び男女枝に紙を結びて妹背
結びを彩り椋と聲の音の通ずるを以て一年供米を結神祠神
木に英のごとくかけて留る地に皂角樹あり又其所に紙を結びて今八皂角
樹を茅楯樹と云
茅楯樹
志ぬのゑ相深川ゑ
氷沢八三冬暗氣にして雪氷り夏土用に至て氷り故に氷沢と云西行庚
橋八昔西行此所に来り児童に向て戯れまる如きを見て是何と問ふに答
へ蕨なりの言葉に感じ蕨と名づけ八いく見ひ久八橋より戻りて仮り田
峠より西行の望嶽松と云あり惟茂塚と云八九重の石塔之其下に家臣金剛兵衛
利綱と云者の墓あり　惟茂の墓八越後国京都山名屋村平等寺に
そなへ其の塔八家臣の立るなり

地の外にも當郡八温泉多し　一鹿教湯　高梨村　一霊泉寺湯　平村
一田沢湯　内湯　山人　一皆瀬湯　一小倉湯　野倉の奥

鴉巣

下の御の分邑ゲンボウと云地の奥松山の中に鴉の巣と云あり一巒聳て其土色も白く五色間色なく草木生育せず險峻にして飛鳥の外生類登ることなし昔此山に路の巣ひしゆゑ名てくさ仏と此両毎に土石流出て山の形嵌巖なり故に迂路より山岩の下流れに動く塔山石にて肌理潤滑にして光彩あり玉の如し中に小さく白色なる岩は猫の金利石に似て美麗色を帯たる碼碯に類して又清澄徹して水晶に比べきを何ぞ小さくして大きなる事を恐る稀なり

筑前豊前両国の境の名に類して実信中の嶺山合浦と云へり

佛岩

大明峠より半里下りて有る仏岩と云る岩石形に似たり文政十三年十月の比岩茸とる者の一人の山に登りて見れば五輪の塔石山明れて里人に語りれば人皆地に

知りて驚怪よりも甚しきものあり十日許登りて平岩ありて又十間許の木二本を立掛足ごしを結び漸く頂に出れば上平にして笠石臺石を重ねたり

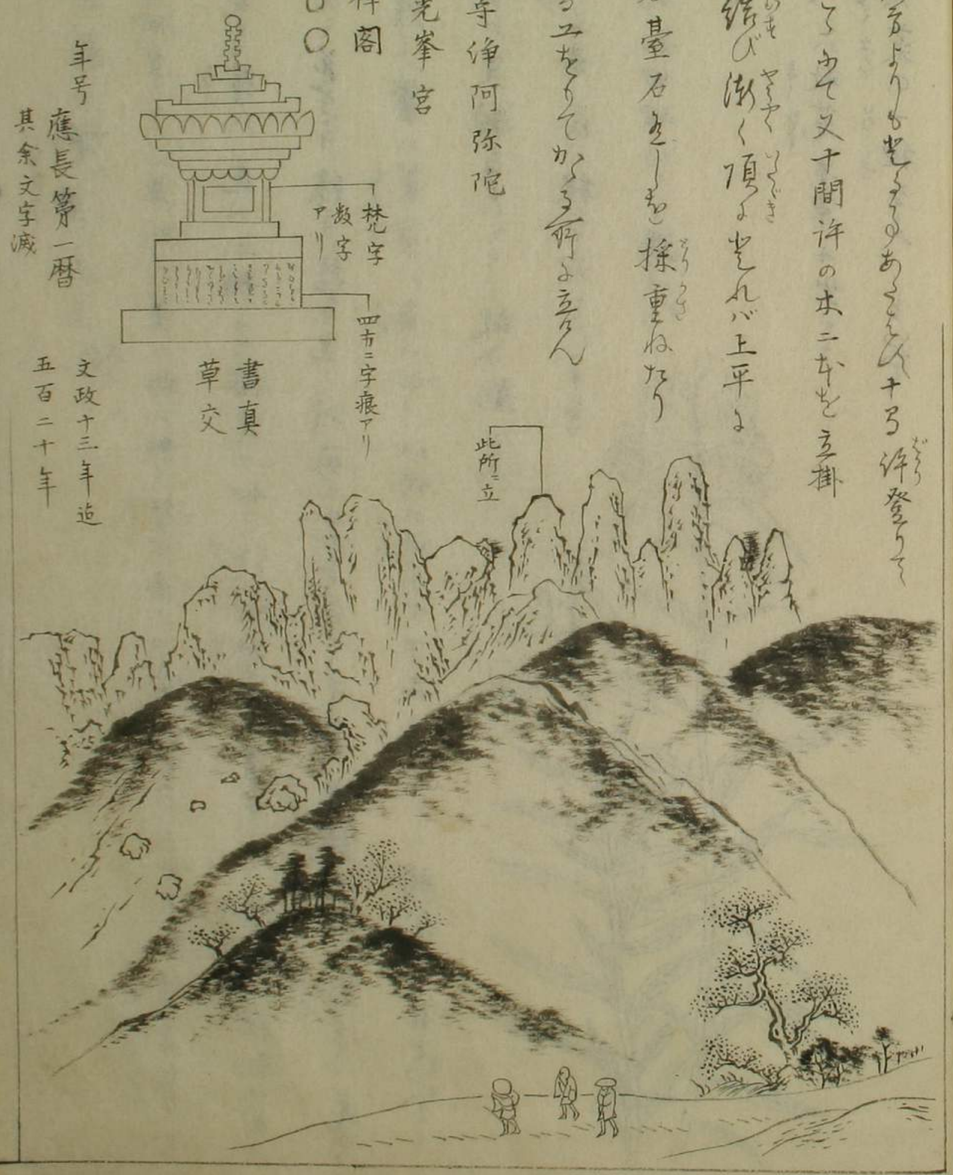
と云いつゝある立てかゝる所に立て

西肥前大守伸阿弥陀

北息女日光峯宮

東近江禅阿

南○○○○



信濃奇區一覽巻之三終

柳草

和田嶺ゟ柳草とゝふ草ゟ葉ハ柳の如く莖の高さ四五尺肥さるハ六七尺數莖直立して莖の末ゟ花を著く花ハ五瓣ゟて梅花の如く淡紅紫色実ゟ蒴の様ゟ初ゟ幹ゟ花さき後ゟ枝を生し枝毎ゟ毛をさゝ花美觀群ゟ冠ゟり花の後実を結ゟ實ハ莱角の角の如し廿四の面ゟて下品ゟりのハ諸國ゟる有とゝ如此大ゟ花の美觀ゟるハなし故ゟ都下の花戸本州ゟ来ゟ根を求てゟるを欲ゟ此花和田峠のゟゟ浸ゟ諸山ゟゟり

一説ニハ救荒本草ゟ出ゟる柳葉菜の一種ゟるゝとゝゟり